THE GALLERY

もくじ　■特集｜「ニューアートシーン・イン・いわき 竹内公太展　浜の向こう」— 只今、鋭意準備中。
■企画展｜「「がまくんとかえるくん」誕生50周年記念　アーノルド・ローベル展」「生誕110年　傑作誕生・佐藤忠良」
■常設展示室から　■学芸員ノート　■今後の展覧会

特集｜special issue
「ニューアートシーン・イン・いわき 竹内公太展　浜の向こう」— 只今、鋭意準備中。

「竹内公太展 浜の向こう」は、いわき市立美術館が1991年から「今日的な独自の表現を展開するいわきの作家」を世界に向けて発信することを目的に開催している「ニューアートシーン・イン・いわき」の48回目の展覧会です。東日本大震災の後、現代の多くの表現者がそうであったように、兵庫県出身の竹内公太も2011年、被災地東北に足を踏み入れました。その後、緊急時作業に従事し、2012年にいわき市に移住、以来いわき市をベースとして制作を続けています。

2011年8月28日、福島第一原子力発電所の現況をリアルタイムで世界に伝えるライブカメラの前に、真っ白な放射線防護服に身を包んだ一人の男が立ち、無言でカメラに向かって指を差し続けるという出来事[fig.1]がありました。10日後、男は個人ウェブサイ

左
fig.1「指差し作業員」による映像

右
fig.4《盲目の爆弾、コウモリの方法》

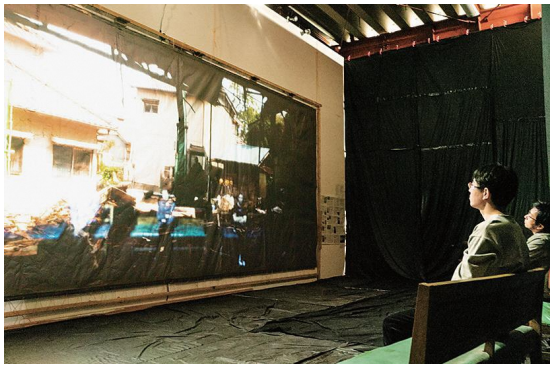
トを立ち上げ、原発廃炉作業員の労働環境改善について提案しながら、当事者と他者の関係についての問いを投げかけました。「私が指さしたのはカメラを設置した東京電力さん及び政府へであり、ライブ配信や後に動画をモニターで見る方々、そしてスマートフォンを通して見る自分自身へでもあります」と。

そして半年後、竹内公太は、この「指差し作業員」の代理人として、一連の出来事を内容とした個展「公然の秘密」(2012、SNOW Contemporary、東京)を開催しています。

いわきに移住して10年、常磐炭鉱の町の賑わいを物語るかつての劇場――時代の波に取り残され廃墟となった「三函座」が解体される一部始終の記録から編集した映像と三函座からもらい受けた銀幕スクリーンと椅子によるインスタレーション《三函座の解体》(2013)[fig.2]、図書館で手にした『近代いわき経済史考:碑文にみる伝承100年の記録』(斎藤伊知郎著、1976)に掲載されていた市内の石碑約170基を探訪してそれと同じ構図の写真を撮った《石碑を二度撮る》(2013－2016)[fig.3]や、戦中に勿来の浜から米国本土に向けて放たれた風船爆弾の軌跡を探った映像作品《盲目の爆弾、コウモリの方法》(2020)[fig.4]など、竹内は地域の近現代の歴史に根差した作品を発表。一方、東京電力福島第一原子力発電所周辺の帰還困難区域を会場にしているため避難指示が解除されるまで見に行くことができない国際展「Don't Follow the Wind」(2015－)の参加アーティストとして作品を更新しつつ、実行委員として来るべき一般公開に向けた運営・管理も担っています。

「浜の向こう」と題した今回の展覧会は、竹内がいわきで過ごした10年間の活動の一端を紹介しようとするものです(これでいわきに恩返しができたらと竹内は言います)。出品作品は、映像作品、写真作品、インスタレーションなど10点。内1作品は144点(予定)のドローイング群からなる新作《盲目の爆弾の光景》(仮)が含まれます。

中でも展覧会の核の一つとなるのが、32分間のビデオエッセイ《盲目の爆弾、コウモリの方法》[fig.4]です。第二次世界大戦末期にアメリカ本土を直接攻撃しようとして日本陸軍が研究開発した秘密兵器で、国内3つの基地から9,800発ほどが偏西風にのせて放球され、そのうちおよそ数百発がアメリカ本土に到着したという記録が残る風船爆弾について描いた作品には、アメリカの国立公文書館で得た記録を参考にカメラ付きドローンを飛ばしてその最



左
fig.2《三函座の解体》展示風景

右
fig.3《石碑を二度撮る》より村有林払下之碑
左:斎藤伊知郎撮影(『近代いわき経済史考:碑文にみる伝承100年の記録』より)
右:竹内公太撮影

後の動きを「再演」した映像、公文書記録、証言者インタビューなどが次々と現れ、コウモリが案内役となり、風まかせの盲目の爆弾の記憶が語り描かれます。

さて、この風船爆弾[fig.5]ですが、勿来の浜から打ち上げられていたことを知っていますか。長くいわきに住んでいながら「聞いたことはあるけれど……」という方が多いのではないでしょうか。「その時、浜のこちら側はいったいどんな様子だったのだろう」。展覧会の開催にあたり、こんな疑問に答えるレクチャー＆ツアー「浜の記憶をさぐる」を計画しています。

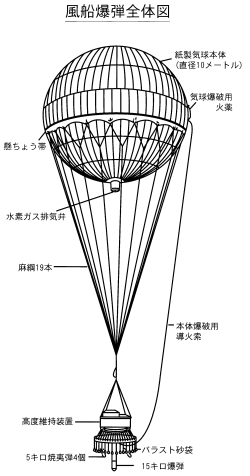


fig.5 風船爆弾全体
林えいだい著
『女たちの風船爆弾』
（亜紀書房、1985）より

地元をよく知る人から浜にはどのようなかたちで「記憶」が残されているかという話を聞き、作家がどのような取材をもとにどのような意図で作品を制作したかを語るレクチャーが前半。後半は、ソビエトに墜ちないように仙台以南の太平洋沿岸であること、バラスト用の砂の調達が容易であること、運搬に便利な国道、鉄道の沿線であること、人の目につきにくい山に囲まれた地形であることなど、勿来の浜が携えていた風船爆弾放球基地立地の好条件を実際に歩いて体感しようとする催しです。

6月某日、勿来関文学歴史館に集合した私たち（竹内さん、勿来文歴の渡辺学芸員、地元の歴史に詳しい方、筆者の4人）は、地図[fig.6]を片手に周辺を歩くこと2時間30分。引き込み線、プラットホーム、基地本部、兵舎、弾薬庫、そして山間の放球台などなど、今は跡形もなくなってしまっている構造物を容易に想像できる地形や地面に残された痕跡を巡り、レクチャー＆ツアーの実施に向けた構想（作戦）を練りました。

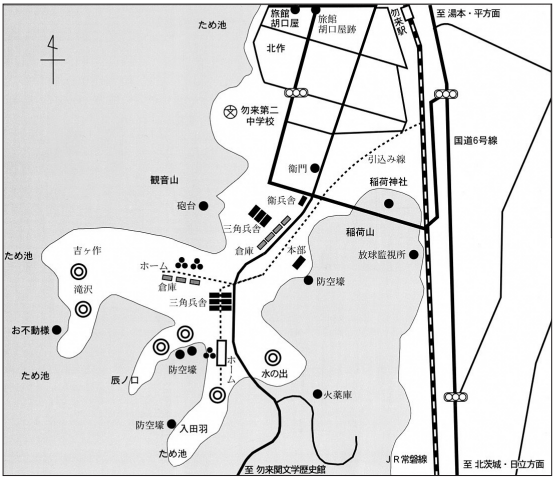


fig.6 勿来基地地図
『フ号作戦と勿来
－風船爆弾の記憶』
（いわき市勿来関文学歴史館、2004）より

他にも、竹内公太の手法に倣い、地図や写真、著述などの資料を持ち寄って絵を描くドローイングワークショップや、作家と参加者が双方向で作品についておしゃべりするちょっと変わったアーティストトーク、竹内さんとアーティストの瀬尾夏美さん、映像作家の小森はるかさんによるスペシャルトークなど、作品に秘められたメッセージをより多角的に受けとめてもらえるような仕掛けを準備しています。また、映像作品《盲目の爆弾、コウモリの方法》と映像インスタレーション《三函座の解体》については、より高い展示効果が実現できるアリオス小劇場での展示に向けて、計画を進めています(12月9日(金) ～12月11日(日)の期間限定で展示予定)。

開幕まで残すところ60日余り、「ニューアートシーン・イン・いわき 竹内公太展　浜の向こう」は、作家を中心に様々な方々の協力をいただきながら鋭意準備中です。美術館やアリオス小劇場で作品と対峙する方々、関連事業の中でアーティストとリアルに出会う方々にとっても、本展が今日的な独自のアート体験の場になることができたら幸いです。

■表紙作品　《シューティング(コールドクリーク)》　2021　写真

竹内公太は、第二次世界大戦時に勿来など日本の浜から米国本土に向けて放たれた風船爆弾の調査のために渡米。国立公文書館に残る米軍情報部の報告書から得た情報や目撃者の証言を作品へと繋げています。
原子爆弾を開発するマンハッタン計画においてプルトニウムの精製が行われたワシントン州にある核施設群であったハンフォード・サイト（現在同地では米国最大級の放射性廃棄物問題を抱え除染作業が行われている）。1945年3月10日、その敷地から数マイルの「コールドクリーク」と呼ばれる場所に着地し、風に引きずられていた風船を発見した警備兵がピストルで撃って動きを止めたという記録から、竹内はその地を訪れ自ら指でつくった射撃のジェスチャーを撮影しました。

竹内公太プロフィール

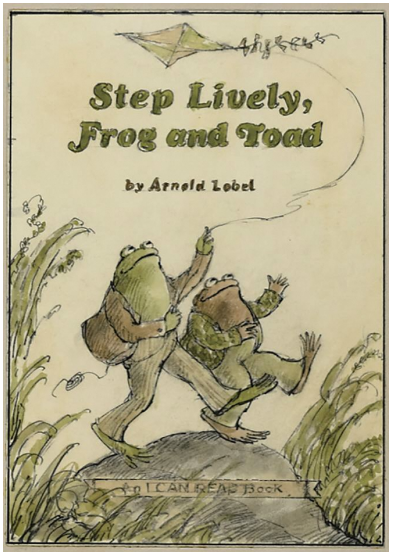
1982年兵庫県生まれ。福島県いわき市在住。 2008年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。
パラレルな身体と憑依をテーマに、映像・写真のインスタレーション等を制作。失われた歴史の痕跡を辿り、隔絶された土地で地域の人々と協働しながら、メディアと人の関係を探る。福島県帰還困難区域内の展覧会「Don't Follow the Wind」実行委員。東京電力福島第一原発ライブカメラの「指差し作業員」の代理人。作家または代理人として2019年「百年の編み手たち―流動する日本の近現代美術―」（東京都現代美術館）や2017年「Japanorama. A new vision on art since 1970」（Centre Pompidou-Metz、メス、フランス）など国内外の展覧会で作品発表。「Tokyo Contemporary Art Award 2021－2023」受賞。

「ニューアートシーン・イン・いわき 竹内公太展　浜の向こう」
会期：11月3日（木・祝）～12月18日（日）　月曜休館
会場：いわき市立美術館1Fロビー、いわきアリオス小劇場

（学芸員　植田玲子）

企画展｜「がまくんとかえるくん」誕生50周年記念　アーノルド・ローベル展

9月3日（土）～10月23日（日）



『ふたりはきょうも』
表紙下絵（未採用の題名）
1979年

Courtesy of the Estate of Arnold Lobel.
©1979 Arnold Lobel.
Used by permission of HarperCollins Publishers.

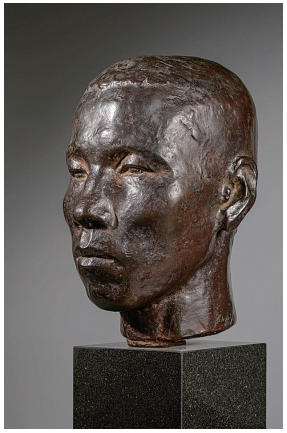
のんびり屋のがまくんとしっかり者のかえるくんの温かな友情にあふれた日常を描く絵本「がまくんとかえるくん」シリーズ。本展は、同シリーズ誕生50周年を記念して作者アーノルド・ローベル（1933－1987、アメリカ）を広く紹介する日本初の展覧会で、ローベルが54年の生涯で手がけた絵本から約30冊を選び、原画やスケッチなど約200点によって初期から晩年までの創作をたどろうとするものです。中には、物語の構想段階のメモ、ページ割り案、編集者とのやりとりを記すレイアウト用紙など、絵本の制作工程が分かるような興味深い資料も含まれ、完成までの試行錯誤の様子をうかがうことができます。また、「つみきのいえ」で第81回アカデミー賞短編アニメーション賞を受賞したアニメーション作家の加藤久仁生による、がまくんとかえるくんのオリジナルショートムービー《一日一年》もみどころのひとつです。関連の催しも予定しておりますので、ぜひお出かけください。

企画展｜生誕110年　傑作誕生・佐藤忠良

11月5日（土）～12月18日（日）

佐藤忠良（1912－2011、宮城県）は戦後日本の具象彫刻を代表する作家であり、『おおきなかぶ』をはじめとする絵本挿絵でも知られています。生誕110年を機に開催する本展覧会では、佐藤が手掛けた三つの傑作――「日本人の手で初めて日本人の顔を表現した」と高く評価された《群馬の人》、身体と衣服によって生まれる形態の均衡を意識し、独自の具象表現に至った《帽子・夏》、そして、動感あふれる描写とリズミカルな場面展開によって読者の心をつかみ、いまや三世代にわたって読み継がれているロングセラー絵本『おおきなかぶ』に焦点を当て、彫刻や素描、絵本原画、そして佐藤自身が収集したロダンやマリーニ、ピカソらの作品からなる「佐藤忠良コレクション」を展示することで、傑作たちが誕生した背景を紐解いていきます。

《帽子・夏》　1972年　ブロンズ



《群馬の人》　1952年　ブロンズ

『おおきなかぶ』
絵本原画、表紙・裏表紙
［1962年5月刊］
紙、水彩・インク・
コンテ・鉛筆
（前期後期で場面替え・
本図は前期展示）

掲載作品はいずれも宮城県美術館蔵　photo©佐々木香輔

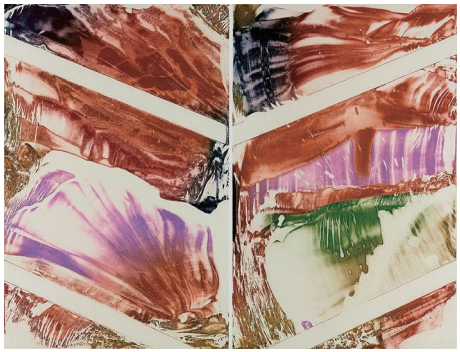
常設展示室から

高松次郎《影(A)》　1964年　油彩・合板　162.5×131.0×12.0cm
©The Estate of Jiro Takamatsu, Courtesy of Yumiko Chiba Associates

「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」(「ヨハネによる福音書」1章5節、『聖書』新共同訳、日本聖書協会、1987年)。聖書を引用するまでもなく、多くの宗教において、神性は光として語られてきました。当然、宗教美術においても神性は光として表され、光輪や後光の表現が生まれたり、劇的な光の表現が追求されることとなりました。また宗教美術を離れた文脈においても、印象派の画家たちが屋外に出て熱心に外光の表現に取り組んだように、光が芸術家の関心の対象であったことは言うまでもありません。

一方、誰の目にも明らかな自然現象であるはずの「影」を絵画において描写するということは、歴史上、決して当たり前のことではありませんでした。一つの光源に基づいた体系的な影(投影)や陰影表現が現れるのは、西洋においては15世紀イタリア、ルネサンスを待たねばなりません。ルネサンスという人間を中心とした客観的な世界把握を目指そうという精神文化が登場するまで、影が描かれることはほとんどなかったのです。

美術においてそれぞれの歴史を辿ってきた光と影。現代美術において、それらを描くこと／描かないことは、どのような意味を持つでしょうか。令和4年度後期の常設展では「光と影の現代美術」というテーマで所蔵品を紹介します。出品作、高松次郎《影(A)》は、作家による〈影〉シリーズの最初期の作品です。合板による書割的な舞台設定の上に、テーブルや日用品の影のみが描かれています。実在を持たない「影」を描くことにより、不在であるはずの品々の存在が、かえって意識される本作は、実在と不在、現実と虚構の狭間へと私たちを誘います。そのほか光や影を描いた作品、あるいはそれらを素材とした作品をご覧いただきます。多種多様な表現をお楽しみください。



加納光於《「波動説」―intaglioをめぐって No. 19》　1984－85年
カラーインタリオ(2版6色)・紙　44.5×58.3cm

小企画では、後期IIに収蔵作家セレクションとして、加納光於を特集します。昨年度、作家のご厚意により、〈「波動説」―intaglioをめぐって〉シリーズ、全33点中23点を寄贈いただきました。既収蔵の作品と合わせて、作家の多岐にわたる活動を振り返ります。

(学芸員　徳永祐樹)

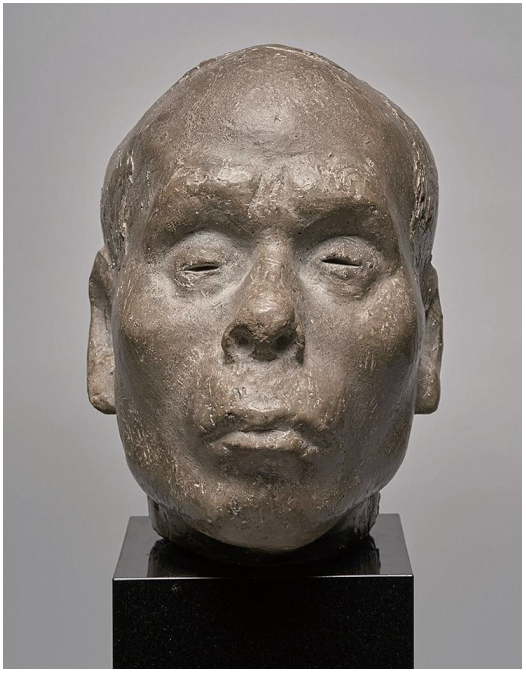
常設展後期
光と影の現代美術
　令和4年10月18日(火)～令和5年4月16日(日)
小企画Ⅰ　炭砿と作家たち
　令和4年10月18日(火)～令和5年1月22日(日)
小企画Ⅱ　収蔵作家セレクション:加納光於
　令和5年1月24日(火)～4月16日(日)

学芸員ノート｜佐藤忠良《常磐の大工》

当館で11月5日から開催される企画展「生誕110年　傑作誕生・佐藤忠良」に佐藤の初期の代表作《常磐の大工》(1956)と現在のいわき市内に位置する炭砿で描いた12点のスケッチが出品されます。戦後日本を代表する具象彫刻家・佐藤忠良といわき市とのかかわりは深く、1952年から53年にかけて常磐市(現・いわき市)の炭砿会社の依頼で屋外彫刻《母子想》*を設置すると、地元の作家と交流しながら市内の炭砿へスケッチ旅行に訪れるようになります。そして当館の設立にも関わり、開館後は新収蔵作品の選定評価委員を務めるなど、当館にとっても特別な作家のひとりです。

さて、佐藤といわきとの関係を語るうえで欠かせない作品が上述の《常磐の大工》です。モデルとなった男性は当時市内の炭砿における施工を請け負っていた大工であり、《母子想》の制作にも携わっています。職人然とした特徴的な顔つきに惹かれたのか、佐藤に同伴してスケッチ旅行に訪れた西常雄、鳥居敏文らもこぞって彼の顔を描き、本作もそののちに制作されました。モデルの男性は白河の出身ですが、佐藤自身、人物の顔からその土地の出身者やその血縁者を見分ける能力に自信を持っており、この大工もいわきの遺伝子を持った人物なのかもしれません。

佐藤によると具象彫刻には対象への共感が必要であるといいます。佐藤は第二次世界大戦終戦直後にシベリアで捕虜となり、過酷な拘留生活を経験すると、復員後にいわきの炭砿や銚子の漁村を訪れながら厳しい環境下で強かに生きる人々の生活風景をスケッチに残し、ときにはその地域の人物を彫刻に表しました。《常磐の大工》の職人らしい朴訥(ぼくとつ)とした容貌からは、炭砿に生きる人々への共感に基づく佐藤の具象表現を伺うことができます。



佐藤忠良《常磐の大工》　1956年　セメント　宮城県美術館蔵
photo©佐々木香輔

市井の人々のありのままの姿を表現し、リアリズムを追求した佐藤の傑作たちをぜひ展覧会でご覧ください。

＊閉山に伴い現在は福島工業高等専門学校構内に設置されています。

(学芸員　伊藤圭一郎)

今後の主な展覧会のご案内

(新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、中止や延期、または内容等に変更が生じる場合があります。)

企画展

「がまくんとかえるくん」誕生50周年記念
アーノルド・ローベル展
令和4年9月3日(土)~10月23日(日)

生誕110年　傑作誕生・佐藤忠良
令和4年11月5日(土)~12月18日(日)

ニューアートシーン・イン・いわき 竹内公太展　浜の向こう
令和4年11月3日(木・祝)~12月18日(日)

いわき市小・中学生版画展
令和5年1月5日(木)~1月22日(日)

第52回いわき市民美術展覧会
〈書の部〉令和5年2月3日(金)~2月12日(日)
〈絵画・彫塑の部〉令和5年2月17日(金)~2月26日(日)
〈陶芸の部、写真の部〉令和5年3月3日(金)~3月12日(日)

常設展後期

光と影の現代美術
令和4年10月18日(火)~令和5年4月16日(日)

小企画Ⅰ　炭砿と作家たち
令和4年10月18日(火)~令和5年1月22日(日)

小企画Ⅱ　収蔵作家セレクション:加納光於
令和5年1月24日(火)~4月16日(日)

2022年9月15日発行　編集・発行　いわき市立美術館　☎0246-25-1111　〒970-8026 福島県いわき市平字堂根町4-4